

農作物技術情報 第3号 花き

発行日 平成29年 5月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<http://i-agri.net/Index/gate002>」

- ◆ りんどう 適期定植、適期病害虫防除に努めましょう。
- ◆ 小ぎく 定植、整枝、病害虫防除などの作業を計画的に行いましょう。

りんどう

1 生育の状況

これまでのところ地域差はありますが、春先の低温の影響で草丈や節数ともに前年値を下回っていますが、ほぼ平年並みに推移しています。

病害虫では、発生量は少ないですがハダニ類の発生が始まっています。

育苗は各地域とも概ね順調に進み、6月上旬から本格的に定植が始まる見込みです。

2 圃場管理〔株仕立て、灌水、除草〕

株仕立てが終わっていない圃場では、草丈が30~40cm頃までに株当たり7本を目安に整理します。

5月下旬から6月は茎の伸長量が大きく、また花芽分化の時期となります。水分を多く吸収するとともに、肥料成分も土壌水分があることで吸収されるので、降雨が少ない場合は必ず灌水を行います。ただし、高温時に灌水を行うと根に障害が発生し、地上部まで影響を及ぼすことがあるので、日中を避け朝方などに行いましょう。なお、圃場に数日以上の間水をとめておくことは避けてください。

圃場の乾燥は葉先枯れ症状の発生を助長します。発生しやすい圃場では、灌水の徹底と石灰資材の葉面散布で発生を抑えましょう。

圃場内や周辺の雑草はハダニ類やアザミウマ類の繁殖源となるので、放置することのないよう早めに処理します。畦畔の草刈りや通路の除草を早めに行いましょう。除草剤を使用する際は、必ず農薬登録や使用方法も確認し、りんどうに飛散しないように注意します。

3 施肥管理

基肥としてりんどう専用肥料を用いた場合、追肥時期は側芽発生期（葉の付け根に小さな腋芽が見える頃）前です。北上市付近における平年の側芽発生期は、早生種で6月上旬、晩生種で6月下旬ですが、近年の高温化によって早まっている場合があるので、時期を逸さないよう注意しましょう。また、葉色や葉の大きさ、草丈などで判断し、過剰にならないよう留意してください。

施肥については、2年目まで肥料成分がゆっくり溶け出す緩効性肥料である「りんどう定植2年肥料」を使用した定植も行われるようになりました。基本的には2年目の施肥が不要となり、施肥作業の省力化になりますが、土壌条件等によっては、2年目の春に肥料の過不足が見られる場合が

ありますので、生育状況をよく観察して管理してください。

表 りんどう定植圃場施肥量例（10 aあたり）

施肥例	肥料銘柄	資材成分量	現物施肥量
施肥例 1	りんどう専用肥料	窒素 15% リン酸 16% カリ 15%	60～80kg
	苦土重焼燐	く溶性 35% 水溶性 16%	30kg
施肥例 2	りんどう一本勝負	窒素 15% リン酸 10% カリ 12%	60～80kg
	苦土重焼燐	く溶性 35% 水溶性 16%	40kg
施肥例 3	りんどう定植2年肥料	窒素 15% リン酸 10% カリ 10%	180～150kg
	苦土重焼燐	く溶性 35% 水溶性 16%	40kg

4 定植

天候を見ながら早めに計画的に作業を進めましょう。堆肥はできるだけ早く施用して碎土し、その後、基肥を施用し床作り、マルチ張りを行います。また、排水不良圃場では明渠、排水路の設置等の対策を講じます。定植年の株養成次第でその後の生育が決まりますので、できる限り排水性等圃場環境を整備したうえで定植して下さい。

定植は苗が老化しないうちに早めに行います。定植作業は苗の萎れを防ぐため曇天、無風時が理想的ですが、晴れた日に行う場合は、トレイが高温にならないように注意し、また、根が乾燥しないように植えつけ直前にトレイから取り出すようにします。

苗にジベレリン処理を行った場合は、処理後、早めに（数日以内）定植してください。また、定植後は薄めの液肥、または水を灌注し、床土と苗をなじませます。定植後は活着や初期生育を促進するため乾燥しないように管理します。

5 病虫害防除

（1）葉枯病

県内全域で発生が見られます。薬剤散布による防除を徹底しましょう。下葉に感染していたものが降雨により順次上位葉に拡大するので、定期的な薬剤散布による拡大防止に努めてください。

（2）リンドウホソハマキ

県中南部から県北部、沿岸部まで越冬世代の羽化が確認されています。昨年発生した圃場では今年も注意が必要です。近年、発生が平年より早まっていますので、今後の発生予察情報等を参考に適期防除に努めてください。該当時期の防除の徹底とともに、潜葉痕や茎頂部の食害があるかよく観察してください。

（3）ハダニ類

ハダニは高温・乾燥条件で増殖しますので、今後の気象経過に留意するとともに、下位の葉裏の寄生状況を観察し、発生を見たら早めに薬剤散布を行って防除してください。増殖源となる圃場周辺の雑草防除も併せて行います。

小ぎく

1 生育の状況

8月咲き品種は、多くの地域で5月上旬に定植となりました。側枝の発生も見られ順調に推移しています。

9月咲き品種については現在、育苗中で概ね順調に進んでいます。

病害虫では、白さび病やべと病が育苗中から見られ、定植圃場でも確認されているところがあります。

2 定植後の管理

8月咲き品種では、草丈不足が心配されますので、初期生育を確保するために水分不足にならないよう注意し、必要に応じて灌水を行いましょ。追肥は一般には不要ですが、伸びが悪い場合や、葉色が薄い場合などは少量の追肥（液肥）も効果的です。

摘心後に伸びた側枝は20～30cmの頃に3～4本に整理して品質確保を図ります。この時強い枝から残すのではなく、揃った枝を残すようにします。仕立て本数は品種特性に応じて変更します。

無マルチ栽培の場合は、土寄せを行い生育の促進を図ります。側枝が10cm程度伸びた頃と、整枝を行ったあとの2回が実施時期の目安です。

3 病害虫防除

(1) 害虫

アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類、ハモグリバエ類などが問題となります。発生状況の観察に努め、早期防除に努めます。併せて増殖源となる雑草防除も行います。

(2) 白さび病

キク栽培では特に重要な病害です。育苗期で発生がみられた場合、定植圃場で発生しやすくなります。定期的な薬剤散布で予防します。新葉の展開に合わせて5～7日間隔で散布することが基本ですが、降雨が続く場合などは散布間隔を狭めます。

薬剤の選定は各地域の防除暦等を参考にしてください。



写真 小ぎくの白さび病（葉裏）

(3) ウイルス・ウイロイド病

キクに発生するわい化病（キクわい化ウイロイド）、キクえそ病（TSWV）に感染した株は回復することがありません。

圃場に残すことで他への伝染源となるので、見つけ次第抜き捨てることを徹底してください。

春の農作業安全月間実施中！ [4月15日]
[~6月15日]

いつもの慣れが落とし穴 急がずあせらず 農作業安全
「山火事警戒宣言発令中」

次号は6月29日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。